

## 従軍兵士と戦争詩：ベトナム戦争・日中戦争

白井洋子

米国人にとってのベトナム戦争と日本人にとっての日中戦争にはいくつかの重要な共通点が見られる。どちらの戦争も、米国軍、日本軍による侵略戦争であったこと、戦場となったベトナムと中国の民衆はゲリラ戦で抵抗したこと、そして侵略した側の敗戦に終わっていることである。侵略地の民衆によるゲリラ戦術を用いた抵抗戦争は、子ども、老人、女性をすべて巻き込んだ人民戦争として展開されたため、誰が敵なのか分からないという不安を侵略軍兵士に与えた。見えない敵に四六時中包囲されていることへの恐怖は、侵略者をして必然的に民衆に対する無差別の大量殺戮へと向かわせた。かつて小田実は、豊臣秀吉の朝鮮侵略を日本歴史上最初の「海外侵略」と捉え、そして秀吉の侵略軍は日本の歴史はじまって以来の「総力戦」をもってしても、李王朝時代の民衆の抵抗にあって敗北したと述べている。当時としては最新兵器だった鳥銃を採用した「近代戦」であったにもかかわらず、日本軍を破った力は朝鮮民衆の「反侵略」「反日」「抵抗」に「岩」のごとくに固く凝集した民心だったという。小田はそれを「民岩」と形容する。この「民岩」による敗戦体験がのちの歴史認識から欠落した結果が中国侵略だったというのである。米国の強大な軍隊もベトナム民衆によって強固に形成された「民岩」の抵抗の前に敗北を喫したのだった。小田はまた、「民岩」のよって立つものが究極的には抵抗する側の「道徳、倫理のまっとうさ、強さ」であり、それこそが侵略する側には欠けているものであったとも指摘している。<sup>1</sup> 中国とベトナムでの侵略者による略奪と

残虐行為はそのことを如実に証明していた。

本稿では、この二つの戦争にそれぞれ侵略する側から従軍した兵士の目に、敵兵を含むそれぞれの土地の民衆はどのように映っていたのか、「岩」のごとくに固く結集して抵抗してくる侵略地の民衆から何を感じ取ったのかを、かれらが帰還後に詩と短歌の形で発表した作品の中に読み取っていかうとするものである。

## 1. ベトナム戦争と帰還兵詩人——W. D. エアハートと「民岩」

ベトナム戦争は、米国史上戦われたどの戦争においてよりも多くの文学作品や映画のテーマとされてきたが、とりわけ帰還兵によって数多くの詩が生み出されたことでは、他に例を見ない。<sup>2</sup> 文化史家の H. ブルース・フランクリンによれば、ベトナム戦争中、それ以前には文化的エリート階級のものと思われてきた詩が、戦場を体験した兵士たちによって盛んに書かれるようになり、詩は庶民にとって取っ付きにくいという固定観念を払拭する契機となったことは、ベトナム戦争がもたらした文化的所産であるという。<sup>3</sup> 最初から詩人であった兵士はわずかであったと言われるように、帰還兵たちの初期の作品には、戦場での苦しみや戦友を失ったことへの怒りと悲しみをストレートに吐き出したようなものもある。しかし詩集の出版が地道に積み重ねられていく過程で作品への評価も高まり、無名だった帰還兵詩人による作品のアンソロジーもいくつか編纂されるようになると、その読者層も次第に拡大されていった。こうした現象は、それまでの戦争には見られなかったものである。ここで取り上げる W. D. エアハートは、帰還兵詩人の作品集の編纂者、批評家、作家としてもよく知られ、ベトナム戦争が生んだ詩人のなかでも代表的な一人である。

W. D. エアハートは 1948 年に米国ペンシルベニア州フィラデルフィアから 40 マイルほど北の小さな町パーカシイで育った。高校を卒業すると同時に両親の反対を押し切り、17 歳で海兵隊に志願入隊した。新兵訓練直後の 1967 年 1 月にベトナムに派遣され、1968 年のテト攻勢時にフエで負

傷し帰還した。入隊当初のエアハートは、「自由の防衛のために命をかけること以上に尊い使命はない」という愛国心に溢れ、当時の政府や軍関係者には米軍兵士の見本のような優等生の若者だった。しかしわずか数カ月後にはこの戦争の残虐性に嫌気がさし、自分の理想が裏切られたことへの怒りを、さらにはゲリラ兵のみならず、子どもから老人、女性をも含めて一丸となって米軍に向かってくるベトナム戦場の実態を、詩の形で綴るようになった。エアハートのベトナム民衆への眼差しの変化を、その作品から辿ってみることにする。以下、作品タイトル後に括弧で記した年数は、その作品が最初に収められていた詩集の出版年である。ここでは *Beautiful Wreckage: New and Selected Poems* (1999) の作品紹介に基づき、作品掲載詩集の発行年を作品発表の年とした。

ベトナムに派遣された当初のエアハートには、ベトナム人を敵兵と捉える視点はなかった。軍隊教育はベトナム人を人間とはみなさないことを兵士に徹底して叩き込んでいたからである。エアハートの初期の作品はそのことを正直に伝えている。

“Full Moon” (1972)

We were on patrol last night; / And as we moved along,  
We came upon one of the enemy.

Strange, in the bright moon / He did not seem an enemy at all.  
He had arms and legs, a head . . .

. . . and a rifle. / I shot him.<sup>4</sup>

“Hunting” (1972) というタイトルの次の作品からも、敵兵のベトナム人との戦闘を、狩猟で獲物を追い回す程度にしか考えていなかったことがよくわかる。

.....

The thought occurs

That I have never hunted anything in my whole life

Except other men.

.....<sup>5</sup>

しかし、ゲリラ兵ばかりか、子どもから老人まで、女性をも交えた人びとが一丸となって米軍に立ち向かってくるこの戦争の実態を知らされるうちに、米軍に向けられたベトナム民衆の反発と抵抗が生半可なものではないことを感じ取るようになる。次の作品がそのことを明確に示している。

“Guerrilla War” (1975)

It's practically impossible / to tell civilians / from the Vietcong.

Nobody wears uniforms. / They all talk / the same language,

.....

They tape grenades / inside their clothes, / and carry satchel charges  
in their market baskets.

Even their women fight / and young boys, / and girls.

It's practically impossible / to tell the civilians / from the Vietcong;

after a while, / you quit trying.<sup>6</sup>

この作品では、子どもまでが手榴弾を隠し持って米軍に向かってくるとい  
うゲリラ戦争の実態が皮肉めいた乾いたタッチで描き出される。日常生活  
すべてが戦場化しているベトナムでは、ゲリラ兵と民間人を区別すること  
など不可能だという、ベトナム人にとっては人民戦争として戦われたこの  
戦争の本質を鮮やかにえぐり出している。

一度、その戦争の目的に疑念を抱き、敵方の民衆へと視線を向けてみる  
と、戦場の風景もこれまでとはまったく違ったものに見えてくる。次の作

品には、敵兵に向けられた作者の心情が遠慮がちに滲み出ている。

“Christ” (1972)

I saw the Crucified Christ three days ago.  
 He did not hang upon The Cross; / But lay instead a shambled terrace  
 Of what had been a house. / There were no nails in His limbs;  
 No crown of thorns, no spear wounds.  
 The soldiers had left nothing / But a small black hole upon His cheek.  
 And He did not cry: “Forgive them, Lord;”  
 But only lay there, gazing at an ashen sky.

Today, on the Resurrection, / Angelic hosts of flies caress His brow;  
 And from His swollen body comes  
 The sweet-sick stench of rotting flesh — / Three days old.<sup>7</sup>

荒野に残されたベトナム人ゲリラ兵の屍を十字架に磔にされたキリストに置き換え、そのキリストに「主よ、かれらを許したまえ」と言わせることで、間接的に米兵の残虐行為を吐露している。最初は敵兵どころか人間とも見なさなかったゲリラ兵の、腐敗して膨張し死臭を漂わせている屍に対して、哀れみを隠そうとはしない。前述の二作とはまったく異なる敵兵への視線がそこにある。

帰還後の戦争が終結した年に発表した“A Relative Thing” (1975) でエアハートは、この戦争に対する米国社会の無関心を痛烈に批判し、この戦争の実態がこれまで教え込まれたような性格のものではないことを赤裸々に描き出すとともに、このような戦争に自分たちを送り出したまま知らん顔を続ける者たちへの募る怒りを、戦場の兵士の立場から作品化したものである。ここベトナムでは、ベトナム人を共産主義の脅威から守るどころか、無抵抗の老人を痛めつけ、女性や子どもを爆撃し、住民の家屋を焼き払い、耕されたばかりの田畑を装甲車でかき回す。われわれがベトナムにもたらしたアメリカ民主主義とは、そういうものだったのさ、という幻滅。当然

のことながら、歓迎してくれるはずだったベトナム民衆からは憎まれ、逆にかれらを敵に回す戦争を強いられている現実を告発し、何も知らずに送り込まれた兵士が残虐行為の共犯者にされていることへの悔しさを滲ませている。

“A Relative Thing” (1975)

We are the ones you sent to fight a war  
you didn't know a thing about.

It didn't take us long to realize / the only land that we controlled  
was covered by the bottoms of our boots.

When the newsmen said that naval ships  
had shelled a VC staging point, / we saw a breastless women  
and her stillborn child.

We laughed at old men stumbling / in the dust in frenzied terror  
to avoid our three-ton trucks.

.....

We have been Democracy on Zippo raids,  
burning houses to the ground,  
driving eager amtracs through new-sown field.

We are the ones who have to live  
with the memory that we were the instruments  
of your pigeon-breasted fantasies. / We are inextricable accomplices  
in this travesty of dreams: / but we are not alone.

.....<sup>8</sup>

戦場におけるエアハートのベトナム民衆に対する心情の変化は、次の作

品、“Making the Children Behave” (1975) でより明確となる。話者エアハートがその視点を 180 度転換させ、侵略される側に想いを馳せていることに注目すべきであろう。これまでベトナム人をおよそ自分たちと同じ人間だとは考えたこともなかったが、もしかするとこの土地の人びとの目には、自分たちこそが余所者の化け物として映っているのではないかという発見と驚きが正直かつ簡潔に表現されている。

“Making the Children Behave” (1975)

Do they think of me now / in those strange Asian Villages  
where nothing ever seemed / quite human / but myself  
and my few grim friends / moving through them / hunched / in lines?

When they tell stories to their children / of the evil  
that awaits misbehavior, / is it me they conjure?<sup>9</sup>

この作品は、作者が自身から抜け出て、外から侵入してきた軍隊の一員としての自らを客観視することで、わずか 48 語からなる短い詩でありながら、ベトナムにおけるアメリカの戦争の本質を鋭く突いたものとなっている。村落の民衆の間を、いかにも居心地わるそうに、しかし格好だけは厳めしく銃を構え背を屈めて足早に歩き去って行く姿は、土地の子どもたちの目にどのように映っているのか、悪魔か化け物としか思われてはいないのではないか、と。戦争は戦場となった土地の子どもたちの眼差しにこそ、その本質が映し出されるのではないか。そのことを読み手にも教え諭すような、情景さえ目に浮かばせるような作品となっている。

エアハートは、テト攻勢時にフエで負傷したが、その時に自分を狙った敵兵、名も知らぬ未知の北ベトナム軍兵士に想いを馳せながらの対話を詩作の中で試みている。

“Letter” (1978)

to a North Vietnamese Soldier Whose Life Crossed Paths with mine in  
Hue City, February 5th, 1968

Thought you killed me / with that rocket? / Well, you nearly did:

.....

But I lived, / long enough to wonder often  
how you missed, long enough  
to wish too many times / you hadn't.

俺を殺<sup>や</sup>ったと思っただろう、ロケット弾で。もう少しのところで死んでい  
たが、生憎と俺は生きている....ずっと考え続けていた、あの時どうして  
殺<sup>や</sup>られなかったのか、いっそ弾が外れなければよかったのにとさえ幾度願っ  
たことか、と。

Do better than that / you cockeyed gunner with the brass  
to send me back alive among a people  
I can never feel / at ease with anymore:

戦争が終結した翌年は、米国の建国 200 年祭と重なっていた。その喧噪の  
中で、もはやそこに居場所を見つけられない詩人は、かつての敵兵に希望  
を託す。米軍が残虐の限りを尽くした戦場を、子どもたちの歌声が溢れる  
緑豊かな土地へと生まれ変わらせてほしい、そしてホーチミンが詩人だっ  
たことを忘れないでほしい、と。

remember where you've been, and why.  
And then build houses; build villages, / dikes and schools, songs  
and children in that green land / I blackened with my shadow  
and the shadow of my flag.

Remember Ho Chi Minh / was a poet; please,  
do not let it all come down / to nothing.<sup>10</sup>



生還はしたものの米国社会にいながらにして疎外感に苛まれていたエアハートだったが、1969年に発覚したミライ虐殺事件、1970年のケント州立大での州兵による4人の学生射殺事件、翌71年に暴露された『米国防総省秘密報告書』（ペンタゴン・ペーパーズ）、これらがその昔に起こったインディアン戦争やヒロシマへの原子爆弾投下や中米における米国籍石油企業の謀略と一続きとなって米国の歴史を織りなしてきていることを見抜くのがあった。“To Those Who Have Gone Home Tired” (1978) の最後連、“What answers will you find / What armor will protect you / when your children ask you / Why?”<sup>11</sup> は、大人たちがしでかしてきた暴力を未来の子どもたちに何と説明するつもりか、ベトナムから生き残って帰還した元兵士に託されたことは何か、という厳しい問いかけとなっている。

戦場のトラウマと、なぜ自分だけが生き残ったのかという戦死した友への罪責感からエアハートを解放するきっかけとなったのは、戦後のベトナム再訪だった。実現するまでには米国と国交のないベトナムからのビザ発給に4年ほどの時間を費やしたが、戦後10年目の年の終わりにようやく念願がかなった。それは米国の帰還兵詩人グループとベトナムの詩人団体との文化交流という形で実現し、1985年12月、エアハートはハノイに降り立った。16年ぶりのベトナム訪問だった。ベトナム再訪のクライマックスは、戦争で5人の息子を失ったナ夫人との面会にあった。その時の複雑な心境を詠んだものが次の作品である。

“For Mrs. Na” (1988)

Cu Chi District December 1985

I always told myself, / If I ever got the chance to go back,  
I'd never say “I'm sorry” / to anyone. Christ,

.....

If I ever go back, / I always told myself,  
I'll hold my head steady / and look them in the eye.

But here I am at last — / and here you are.  
And you lost five sons in the war. / And you haven't any left.

And I'm staring at my hands / and eating tears,  
trying to think of something else to say / besides "I'm sorry."<sup>12</sup>

ベトナムに戻る機会があっても、絶対に謝ったりはしない。20年近くも昔のこと、もう十分じゃないか。決してうつむいたりするのではなく、相手の目を見るんだと自分に言い聞かせてきた。しかし現実には、ここに5人の息子を戦争で亡くし、一人きりになってしまったあなたを前にして、ただうな垂れて自分の手を見つめながら涙をかみ殺し、“I'm sorry”に代わる言葉を探していた。これがガンホー（迷いのない頑固な戦闘員）として戦場を駆け抜けていた元海兵隊員のエアハートの嘘偽りのない姿だった。そしてエアハートにとってのベトナム再訪の結論は次のようなものだった。

The Vietnamese have burdens of their own to bear; they have no need  
and no use for my anguish or my guilt. My war is over. It ended long  
ago.<sup>13</sup>

ベトナムの再建は、それがどんなに重く厳しいものであっても、かれら自身の仕事であり、そこに自分の苦悩や罪責感が入り込む余地はない。私の戦争はもう終わった。戦争は、とっくの昔に終わっていたのだ。こうした思いは、先の「北ベトナム兵士への手紙」の内容とも共通したものだった。その思いとは、自分にはここ米国で自分にしかできないことがある、という前向きな決意でもあった。

ベトナム再訪後のエアハートの詩作には、初期の作品に充満していた自国から裏切られたことへの憤りと戦場で命を落とした戦友への罪責感を超越した、戦場体験者としての次世代への力強いメッセージが込められている。

“The Invasion of Grenada” (1988)

I didn't want a monument, / not even one as sober as that  
 vast black wall of broken lives. / I didn't want a postage stamp.  
 I didn't want a road beside the Delaware  
 River with a sign proclaiming:  
 "Vietnam Veterans Memorial Highway."

What I wanted was a simple recognition  
 of the limits of our power as a nation / to inflict our will on others.  
 What I wanted was an understanding  
 that the world is neither black-and-white / nor ours.

What I wanted / was an end to monuments.<sup>14</sup>

1980年代のレーガン政権の時代、ベトナム・シンドロームからの脱却を目指す米国は、中米のグレナダへの侵攻（1983）、パナマへの侵攻（1989）を強行する中で、強いアメリカの復活を図った。1982年に首府ワシントンにベトナム戦没者記念碑が造られて以降、国中のいたるところに同様の記念碑が建造され、記念切手が発行され、橋や道路には帰還兵や戦没者記念の命名がされた。エアハートがこの作品で訴えているのは、米国が力で他の国の人びとを支配しようとすることの限界、戦死者名を刻印した記念碑をもうこれ以上造らないこと、つまり戦争のない世界の構築である。ベトナム戦争の教訓がそこにあった。

## 2. 日中戦争と学徒兵——渡部良三と八路軍兵士

志願兵として海兵隊に入隊しベトナムに渡ったエアハートとは異なり、日中戦争がアジア太平洋戦争として末期に差しかった1943年10月、中央大学経済学部3年生だった渡部良三は明治神宮外苑競技場での「出陣学徒壮行会」に参加し、徴兵検査を受けた後の翌年春、中国大陆に送られ、旧日本帝国陸軍の河北省深県東魏家橋鎮駐屯部隊に配属された。そこで渡部は、十分な初期訓練の終わっていない新兵に対しての、「殺人演習」とも

呼ばれた「刺突訓練」に直面することになる。これは「戦闘時における度胸をつけさせるため」という名目の下、中国人捕虜を藁人形代わりに銃剣で刺突し虐殺する行為で、捕虜とは中国共産党第八路軍の兵士たちであった。渡部は、キリスト者としての信仰から、上官に命じられた捕虜の虐殺を拒否したのである。「敵前抗命」にも等しい決断をした渡部を待っていたのは、軍隊内での徹底した差別と凄惨なリンチだった。渡部は苛酷な軍隊体験を短歌に詠み込み、新兵が唯一自由になれる「厠」でありあわせの紙に書き留めたメモを、帰還時に密かに少しずつ軍衣袴に縫い込んで敗戦した故国へ持ち帰った。それらの短歌は推敲を重ねて編集され、戦後半世紀近くを経た1992年に私家版の歌集として、さらにその2年後にはシャローム図書から『歌集 小さな抵抗』として出版された。2011年には『歌集 小さな抵抗——殺戮を拒んだ日本兵』の表題で岩波現代文庫の一冊として刊行されている。岩波現代文庫版には924首の短歌が収められているが、そのうちの約700首が戦場で詠まれたものである。「当時、日記を綴るには紙数がない。仮にあったとしても書き足るものではない。定期的に私物検査の行われる野戦で、反戦日記は当然没収される。そこで短歌で……と考えた。」渡部にとって短歌とは戦場体験、戦場の記憶を認めるために、「省略を用いられるという技術的な意味で」、「いわば必要に迫られて」選び取った表現手段であったと同時に、「信仰と思想の萌芽の時期の記録」でもあった。<sup>15</sup>

渡部良三は、1922年（大正11年）2月、山形県西置賜郡津川村に生まれた。父の弥一郎は、内村鑑三の唱えた無教会主義キリスト者として、出征する良三に「汝殺す勿れ」という聖書の教えどおりに生きること、神を忘れず、「事に当たって判断に窮したならば、自分の言葉でよいから祈れ」<sup>16</sup>と諭して、別れの言葉とした。渡部は、中国の河北省深県にある小さな邑の駐屯部隊兵士として派遣され、そこで初年兵教育訓練を受けた。ある朝、朝食中に突然上等兵から、中国人捕虜の刺突訓練で「パロ（八路、中国共産党第八路軍兵士）の捕虜を殺させてやる」と聞かされる。噂に聞いてい

た殺人演習だった。幼い頃より人を殺す事は神の教えに背く事だと父に言われてきた渡部は、刺突訓練の予告から実際に自らの手に捕虜刺突のための銃剣を渡されるまでの数時間、どうしてよいのかまったく分からない状態にあった。ただ神に「道をお示してください。力をお与えください」と祈るだけだった。その時、「眩きとも独言ともつかぬ祈りの中で」渡辺は確かに、「汝、キリストを着よ。すべてキリストに<sup>よ</sup>依らざるは罪なり。虐殺を拒め、生命を賭けよ！」という神の声を聞いたという。<sup>17</sup> (引用短歌はすべて『歌集 小さな抵抗』より)

あさいい は じょきょう  
朝飯を食みつつ助教は諭したり「捕虜突殺し肝玉をもて」

ぬぐい得ぬおびえ心にたちしま殺さるる捕虜をおのれに比ぶ

刺し殺す捕虜の数など案ずるな言葉みじかし「ましくらに突け」

いかなる理にことよせて演習に罪明からぬ捕虜殺すとや

へい  
新兵ひとり刺突拒めば戦友らみな息をのみたり吐くものもあり

「殺人演習」とも呼ばれた刺突訓練とは、目隠され、杭に縛りつけられて抵抗できない捕虜を、十人ほどの新兵によって藁人形代わりに銃剣で刺突させ、捕虜の身体をぼろ屑のようにして塚穴に転がして捨てた捕虜虐殺行為である。捕虜の中には目隠しを拒み、自身を殺そうとする日本兵を睨みつける者、我が身を縛りつけられながらも仲間の死を見届けようとする者、呻き声も上げず果てる者がいて、そうした八路軍兵士の死に様は旧帝国陸軍の初年兵渡部にとっては発見にも近い驚きであった。

刺されても呻かず叫ぶこともなし八路の誇りのゆえかあらぬか

深ぶかと胸に刺されし剣の痛み八路うめかず身を<sup>ま</sup>屈げて耐ゆ

きわやかに目かくし拒む八路<sup>はちろ</sup>あり死に処<sup>ど</sup>も殺す人をみむとや

八路とはいかなる人かや刑台にしばられつつも朋友<sup>とも</sup>の屍<sup>し</sup>をみる

憎しみもいかりも見せず穏やかに生命も乞わず八路<sup>パロ</sup>死なむとす

虐殺<sup>ころ</sup>されし八路<sup>はちろ</sup>と共にこの穴に果つるともよし殺すものかや

二十歳前後の八路軍兵士が刑台の杭に縛られた時、日本軍の刺突殺人を遠望していた地元民の列から一人の女性がよろよろと走り寄ってきた。母親らしきその人は息子の助命を乞うているようだったが、古参兵に猿轡をかませられ、引き摺られて刑場の外へ放り出されてしまった。母親らしき女性の声に、すでに杭に縛りつけられていた若い捕虜が叫んだ言葉が、中国語で「仕方がない!」だった。

纏足<sup>てんそく</sup>の女<sup>おみな</sup>は捕虜のいのち乞えり母ごなるらし地にひれふして

生命乞う母ごの叫び消えしとき凜と響きぬ捕虜の「没有法子!」\*

\*「仕方がない、諦めるさ」の意

殺されし八路<sup>パロ</sup>の生い立ち知る由なし親族<sup>うから</sup>もあらむわれにかかわらず

捕虜刺突を拒否した渡部がその後受けた暴力とリンチの凄まじさには想像を絶するものがある。渡部は連日連夜加えられるリンチを、ロマ書5章3節4節を心で唱えることで耐え抜いた。「そればかりではなく、患難さえも喜んでいます。それは、患難が忍耐を生み出し、忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと知っているからです。」<sup>18</sup> 捕虜刺突を拒否して以後、渡部は一切の資格を剥奪され、敗戦時も「第日本帝國陸軍二等兵」(最下級)のままに復員したが、そのことをむしろ「光栄」に思っているという。

渡部は、戦地で自らに加えられたリンチを別として、忘れる事のできない三つの暴力の経験を挙げている。第一に、前述した捕虜の虐殺、第二に、女性密偵の拷問、第三に、住民居住地域の殲滅作戦（焼土作戦）と老若男女を問わない無差別掃討行動である。

もうちち  
双乳房を焼かるとうにひた黙す祖国を守る誇りなるかも

水責めに腫れたる腹を足に蹴る古兵の面のこともなげなり

きわやかに国のゆく末ことほぎて女スパイの首ついに垂る

つい  
終末のときわれの裁きは極まらむ拷問みつ黙しおおせば

女性スパイに加えられる人間を人間とも思わない残虐な拷問を目の当たりにしつつも、なすすべもない自身の情けなさや罪深さを知らされる。渡部はまた、自らの意志によるものと教えられていた「慰安婦」に対しても、人間としての同情と哀れみを覚えるのを禁じ得なかった。と同時に、慰安所に並ぶ日本兵男子の列に軍隊内階級制がそのまま反映されていることへの鋭く率直な反応は、詠者の真っすぐな人柄や品性をそのままに伝えるものでもある。

兵等みな階級順に列をなす浅ましきかな慰安婦<sup>と</sup>を求め

からくに  
唐国<sup>いけにえ</sup>の大地を濡らす慰安婦の涙を凌ぐ犠牲ありや

いかなる権力の故に連れ来たり遠き戦野に人を売るとは

慰安所に足を向けざる兵もあり虐殺<sup>(ころし)</sup>拒みし安堵にも似る

無抵抗の住民民間人に対する無差別殺傷行為も日中戦争の特徴だった。これはベトナム戦争中、ゲリラ兵探索のためとの理由から、ベトナム農村

の非武装の住民を無差別に殺戮した米軍の索敵撃滅作戦（サーチ・アンド・デストロイ）とまったく共通している。ゲリラ兵の活動が民衆によって支えられていたことは、中国でもベトナムでも変わりにはなかった。

靴底に擦れるマッチの青き火に炎あがりぬ<sup>いゑ</sup>民家を焼くなり

隠れ居し老か火達磨に叫びつつまろびいでしを兵は撃ちたり

村は燃ゆ火の海のさまに際涯<sup>はたて</sup>なしいずくに眠る支那の農らは

<sup>(じんめつ)</sup> 燼 滅は夜半におよべり見返れば地平火の海これも<sup>いくさ</sup> 戦か

抗日のちから弱むるすべという村焼く無道を誰がいつより

<sup>さんこう</sup> 三光の余りに<sup>ま</sup> 凄しき<sup>さむ</sup> しわざなり叫び呻きの<sup>みみ</sup> 耳朶より消えず

三光作戦とは、日中戦争での華北における日本軍のとった作戦を中国共産党が名づけたもので、「三光」（焼光、殺光、槍光——焼きつくし、殺しつくし、奪いつくす）を意味する。日本軍が敵とする中国共産党八路軍の根拠地を徹底的に燼滅掃討することを指示したもので、住居家屋や物を焼き払い、人を殺すか追い出すことで、華北一帯を無人無住の地と化すことを目的としていた。<sup>19</sup> 靴底で擦ったマッチ棒で民家の藁屋根に火をつける行為は、米兵がジッポライターでベトナム農村の民家を焼いて回った行為をすぐに連想させる。これも戦か、と思わされるほどの残虐行為を繰り返す軍隊の中において、渡部はいつしか日本の軍隊の負け戦を予感するようになる。

昼はうち夜は待ち伏せして幾にちかこの討伐は負け<sup>いくさ</sup> 戦闘かも

これほどの数多若きを死なしむる<sup>ちから</sup> 権力とはなに国家とはなに



すめろぎ  
天皇の戦争責任なしとうはアジアの民族の容れぬことわり

強いられし傷み残れど侵略をなしたる民族のひとりぞわれは

最後に引用した一首は、渡部の『歌集 小さな抵抗』の締めくくりの一首でもある。渡部自身もこの戦争の被害者ではあるが、中国の民衆にとっては加害者でもあるという重い事実の認識である。キリスト者としての渡部は、刺突訓練で捕虜の八路軍兵士を殺すことを拒否した。しかしキリスト者としてはそこに留まることは許されなかった。復員後に、秘密裏に持ち帰った戦場詠を整理しようと幾度も思い至ったが、「こと捕虜虐殺のことに及ぶと気持が昂り、どうしても筆が進まなかった」と、渡部は言う。心と身体の昂ることにはもう一つの理由があった。「それは捕虜虐殺の際、自らは神の御導きにより虐殺を拒みえたが、ただそれだけの事で、汝殺す勿れのみ教えを上官にも戦友兵士にも一言も説かなかったばかりか、女密偵の拷問、焼土作戦の掃討行動における略奪強姦老幼を問わぬ殺人を目にし乍ら、口を緘じ制止さえしなかった」ことである。<sup>20</sup> 戦時においてキリスト者として生きる道は、自らが侵略する側の兵士であるとの自覚が重なることで、より厳しい茨の道を意味した。

戦後半世紀近くを経た頃、渡部はある高名な歴史学者から「戦場において英雄的行動は期待効果が薄い[中略]虐殺拒否をする前に何故徴兵拒否をしなかったのか」という非難とも受け取れる質問を受けたという(傍点ママ)。渡部は自身の虐殺拒否が英雄的行動であるなどとは、兵役拒否を念頭に浮かべなかった以上に、思いもよらなかったことで、そのように受け止められたことに愕然としたという。信仰ゆえの良心的兵役拒否の思想はすでに明治時代の日本に伝えられ、日露戦争以来、徴兵や兵役を拒否したキリスト者がいたことは事実であり、渡部も復員後、父弥三郎の知人に徴兵拒否者がいたことをその遺品の整理中に知ったとある。渡部自身は、「自分を育ててくれた日本の精神的風土と時代思潮に」抵抗することなく、学徒

兵として出征したのだった。ただひたすら、子どもの頃からの父の教え「汝殺す勿れ」を守ろうとした結果が捕虜虐殺拒否だったのである。<sup>21</sup>

前述の虐殺を「英雄的行動」とする見方に対して、渡部は次のように反論している。

兵役拒否をしようとそれをして罰金を受け又は収監されて懲役刑に服して戦時生産に協力しようと、海外逃亡をしようとも、日本人である限りその歴史(的)責任から逃れることはできません。謂うなれば「天皇の赤子<sup>せきし</sup>」と持ち上げられ、天皇の名において侵略し戦争し略奪し強姦し火付けし無差別殺人をした将兵とどれだけの違いがあろうか。…聖書の教えどおり、世の権力が神の御心に背いたとき、それを明確に認識し得た時から抵抗に立ち上がるべきで、その立ち上がる機会をどこにとるのかの個人差を責める事の出来るのは、神御一人であると思います。その差は、各個人の信仰の度合い、思想の成熟度によるでしょう。<sup>22</sup>

渡部にとって抵抗に立ち上がる機会とは、まさに「血と人膏<sup>あぶら</sup>で赤黒く光る刺突銃が私の手に渡された」、その時だったのである。後年、「捕虜刺殺を拒否する決心は、伝達された当日の朝食時からできていたのか」と訊かれたときにも、渡部は、刺突銃を渡される迄、決心はついていなかったと答えている。「ただ漠然と何とかならないかという、誠に情けない心情」、「イエスかノーかを明確に意思表示できない思考の甘さ」、「少しでも神のみ声を聞きその言葉に信を置いて生きようとする者にとっては、“ノー”しかないと分かっているでも堂々めぐりを避けられなかった」と振り返る。<sup>23</sup> されど目隠しをされ杭に括りつけられた捕虜を目の前にして、銃剣で刺し殺すかどうかの決断を迫られ、拒否すれば自分も殺されるやもという極限状況に置かれた時の、虐殺拒否だった。兵役拒否と虐殺拒否と、その決断の重さは比較できるものではない。渡部の言うように、「抵抗に立ち上がる機会」にどこで直面するか、その機会を決断の時と認識するかどうかの主体の意識の問題なのである。

### 3. 戦場の記憶と戦争詩

W. D. エアハートも渡部良三も、異なる時代の異なる土地での戦争に、侵略した軍隊の兵士として従軍した。ふたりともに直面したのは、外国からの侵略に抗しての人民戦争だった。ベトナムではそれはベトコンと呼ばれた南ベトナム民族解放戦線兵士とのゲリラ戦争であり、北ベトナム正規軍との戦闘であったし、日中戦争時の中国では中国共産党八路軍との戦いとなった。ベトナムでも中国でも、前線で戦うゲリラ兵士や八路軍兵士が民衆と一体となって侵略者への抵抗を繰り広げる人民戦争として戦われた。ベトナムの米軍と中国の日本軍とは、そうした「民岩」との戦いを強いられたのである。エアハートは、4冊ある自伝的回顧録の3冊目『バスティッド』（パクられて、1995）の最後を次の対話で締めくくっている。

“You took the same chance we did. But we don’t have a voice anymore.

We’re dead. You’re not. You do.”

“So?” I said.

“So use it,” he said.<sup>24</sup>

1972年から74年夏にかけてのアメリカ社会は、1975年に終結するベトナム戦争の直前にウォーター事件が発覚し、ニクソン大統領の責任が問われ、大統領が弾劾されるかどうかの大きな渦の中にあった。戦争終結のための和平交渉も滞り、エアハートが“A Relative Thing”で米国民のベトナムでの戦争への無関心を鋭く批判したように、帰還兵士たちは社会からの疎外感を募らせるばかりだった。その疎外感は、“Letter to a North Vietnamese Soldier”（北ベトナム兵士への手紙）の中でエアハートが吐露しているように、「なんであの時に殺られなかったのか」とまで思わせるほどであった。ここに引用した対話は、エアハートと戦死した戦友の亡霊との間で交わされたものである。生き残った者に死者が託すこと、それは戦争の真実を語り伝えることである。死者は声を発せない。だから戦争について語ることができるのは生き残った者だけである。生還者にはその使命があ

るのだ。なぜベトナム人は米軍に抵抗してくるのか、ベトナム人がどんな殺され方をしているのか、なぜ若い米兵がベトナムで死ななければならなかったのか、声にして世の人びとに伝えることだ。

中国戦線で渡部良三も同じ結論に辿り着いた。

生きのびよ獣にならず生きて帰れこの酷きこと言い伝うべく

それでも渡部が戦場詠を発表したのは戦後半世紀近くが過ぎてからのことだった。それほどに刺突訓練による捕虜虐殺との直接的対峙、三光作戦による中国民衆の命と生活の燼滅は、渡部の精神と身体とに痛苦の記憶として深く刻まれてしまっていた。その痛みを乗り越えて生き延びた者の役割を果たす力を与えてくれたのは、渡部の場合、死者の声ではなく、孫からの「おじいちゃん戦争って怖い？」<sup>25</sup> という問いかけだった。幼子の問いかけは、戦場のトラウマに苛まれていた渡部の心を開かせ、生還者である渡部に、戦争の真実を次世代に伝えるという使命感を呼び覚ましてくれたのだった。

エアハートも渡部も、詩と短歌という、余分なものを一切剥ぎ取った簡潔な文学表現を用いることで、戦場の記憶と戦争の真実を伝えるという生還者の道を選んだ。戦争の真実を伝えることは、その戦争の本質を語ることでもある。それぞれの戦争の本質にこの二人を導いたものは、侵略地の民衆の抵抗と戦いを事実として受け止めるだけの澄んだ眼差しにあったのであろう。それは「民岩」と形容された固い民心の結集を新鮮な驚きをもって感知する力、そして自らが侵略軍の一員であることを認識する力でもあった。

注

1 小田実「西方ニ異説アリ——秀吉侵略とベトナム戦争の共通項」『東京新聞』1996年7月25日夕刊。

2 拙稿「ベトナム戦争と帰還兵詩人」『日本女子大学紀要文学部』60号（2011年3月）pp. 51-63を

参照されたい。

3 H. Bruce Franklin, ed. *The Vietnam War: In American Stories, Songs, and Poems* (Boston: Bedford Books of St. Martin's Press, 1996), p. 221.

4 Larry Rottmann, Jan Barry, and Basil Paquet., eds., *Winning Hearts and Minds: War Poems by Vietnam Veterans* (1st Casualty Press, 1972), p. 14.

5 Ibid., p. 33.

6 W. D. Ehrhart, *Beautiful Wreckage* (Easthampton, Mass.: Adastra Press, 1999), p. 5.

7 *Winning Hearts and Minds*, p. 38.

8 *Beautiful Wreckage*, pp. 9–10.

9 Ibid., p. 15.

10 Ibid., pp. 29–30.

11 Ibid., p. 25.

12 Ibid., p. 110.

13 W. D. Ehrhart, *Going Back: An Ex-Marine Returns to Vietnam* (Jefferson, N. C., and London: McFarland & Company, Inc., 1987), p. 180.

14 *Beautiful Wreckage*, p. 75.

15 渡部良三「はじめに」『歌集 小さな抵抗——殺戮を拒んだ日本兵』岩波現代文庫、2011年、vii.

日中戦争の戦場詠としてよく知られているものの一つに、宮柊二の歌集『山西省』(1949)がある。宮は1939年8月から1942年10月までの4年余りを一兵卒として中国大陆に従軍した。『山西省』にも、詠者の中国民衆への共感を想わせる作品が収められており、中国大陆に形成された「民岩」を読み取ることができる。本稿では、宮と同じく一兵卒として従軍し、宮のような歌人ではなかったが、戦場の記憶の記録として戦場で詠歌を始めた渡部を、ベトナム従軍体験が詩人としての出発点となった帰還兵詩人 W. D. Ehrhart とともに考察の対象とした。

16 渡部「講演記録 克服できないでいる戦争体験」同書、241ページ。

17 同上。

18 ローマ人への手紙、『新約聖書』日本聖書刊行会、1970(第二版1985)、271ページ。

19 新井利男／藤原彰編『侵略の証言——中国における日本人戦犯自筆供述書』岩波書店、1999年、4–6ページ。

20 渡部『歌集』viii、249ページ。

21 同上、260–261ページ。

22 同上、261ページ。

23 同上、230ページ。

24 W. D. Ehrhart, *Busted: A Vietnam Veteran in Nixon's America* (Amherst: University of Massachusetts Press, 1995), p. 146.

25 渡部『歌集』251ページ。